

冒頭発言 1

足立 明

この研究会を始めるにあたって、これまでの経過とこの研究会を組織した意図について、簡単に説明させていただきます。

私たち公募研究班は、平成5年度以来、「アジアにおける“開発”の導入と農民の対応」というテーマで何度か研究会をもってきました。この研究会の当初からの目的は、第三世界の開発現象を、これまで蓄積されてきた開発過程に関する経験的・実体的分析に加えて、開発というものを西欧社会をモデルとして歴史的に（権力・知のアンサンブルの中で）構成された強力な言説の束（または世界の見方）として捉え、それが農村部へ浸透し、農民を開発する主体となす過程として分析する枠組みを模索することでした。

そして、研究班の会合を重ねてゆくにつれて不十分ながらわかってきたことは、単純な開発言説の分析では、「第三世界」住民／国民としての主体（意識）がどのように形成されるかを十分理解することはできない、という点でありました。つまり、先進国や途上国政府、開発機関などによって作られた開発や発展の語りが、どのようにして第三世界の住民・国民に内面化されるのか、または拒否されるのかを理解するためには、文芸批評家的な言説分析では「現実」の主体化過程は見えてこないという点であります。そこで、この理解が単なる言説批判にとどまらず、経験的な民族誌的記述をとおして行われるにはどうすべきか、という方法論的な課題が明確になってきました。

また、このような主体形成過程と密接に関わりながら、それと一定独立したレベルの分析の重要性も明らかになってきました。それは、ハビタス・レベルの分析であります。ブルデュー風言えば、開発過程で資本主義的なハビタス（予測・計算など）の強要が、様々に行われ、このハビタスは文化や主体（意識）とも密接に関わりつつ、それらから一定独立した様々な実践の源として機能すると考えられます。そこで、複雑な開発現象をとらえるには、このハビタスに着目する必要があるわけです。もちろん、ハビタス・レベルの分析については、様々な方法論的な問題を抱えているわけですが、少なくとも、この視点からは、政府プロジェクトと多くの NGO プロジェクトが、開発言説や意識のレベルで相

反しているにも関わらず、資本主義的なハビタスの強要という点では同じであり、開発過程における共犯関係にあることを見出しうると思います。

さらに、もう一つ検討を要する問題も明確になってきました。それは、これまで示してきた開発言説と主体化の問題を前提として、そのような開発過程で生起する個々の開発実践が、どのような形で地域、国家、世界システムの運動と連関するかという問題です。私は文化人類学を専攻しているので、村や地域レベルの動きと、それを超えた動きとの関係がとくに気になります。いずれにせよ、これらの間の接合過程をどのように理解するのが、更なる課題であるということです。

しかし、これらの難しい課題を一挙に解決することはできません。そのため、これらの課題に切り込む一つの方法として、同じく公募研究班の富山さんから、オリエンタリズムと開発という問題を設定してはどうか、という提案がなされました。確かに、このオリエンタリズムという枠組みは、上記の課題であった開発言説のみならず、開発現象の民族誌やハビタス・レベルの分析にまで貫通する問題であります。そこで今回の研究会では、「他者」やオリエンタリズムの問題を追求してきた富山さんに、オリエンタリズムとの関係で開発が議論できるように、報告者の方々の組織化をお願いした次第であります。

ですから次に、富山さんから、富山さんの問題意識との関わりで冒頭発言をおこなっていただきたいと思います。

冒頭発言 2

富山 一郎

この「『開発』とオリエンタリズム」という研究会をもとうと思った論点といえますか、私自身の問題設定について少しお話ししたいと思います。「オリエンタリズム」ということばからも当然わかるように、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」という議論を、この研究会の一つの題目である「開発」、あるいは「固有の発展」ということばに関わる議論の中で設定しうるのかどうか、という問題があります。そこでは「オリエンタリズム」という議論がひとえにコロニアリズムという議論と対応して出されていることから